

山城地域の中学校の進路実態について

宇治久世教職員組合・北宇治中学校分会

田中正浩

公立高校の入試制度の変遷

●2004年度入試

南北山城通学圏統合
普通科で特色選抜を導入
第Ⅰ類、第Ⅱ類を一括募集(単独選抜)

新制度の3年間
「混乱の1年目、不安の2年目、あきらめの3年目」(F中学校N先生)

●2006年度入試

府立高4校に理数系の専門学科を設置(西舞鶴、亀岡、桃山、南陽)
長期欠席者特別入学者選抜(朱雀、城陽、西舞鶴)
中高一貫(園部)
普通科総合選択制(大江)

●2007年度入試

八幡市の2校を再編。普通科総合選択制(本校)、人間環境科(南キャンパス)に。
洛陽工業、伏見工業の学科全面再編、夜間定時制を昼間定時制に
城南高校の再編統合(09)に向け、普通科を廃止、単位制教養科学科に。

広域化

A中学校の例

旧制度の最後の3年間と新制度の3年間の普通科への進学率を比較すると、城南高校への進学率が平均で約8%減少した(表1参照)。これは、総合選抜で第1志望に合格できなかった生徒が地域割りで自動的に城南高校に決定していたという事情がある。ではその8%の生徒はどこへ回ったかを見てみると、城陽(4%)、西城陽(2.7%)、久御山(2%)などとなっている。南通学圏への志望が可能になったとはいえ、比較的近隣の高校への進学が多数を占めており、旧南通学圏のうち城陽市以外への進学は平均で1%台と少数である。

また、旧制度なら、「城南は不本意ではあるが、まあ近いからいいか」と思えたかもしれないが、この3年間は第2順位以下へ回った生徒はその多くが旧南通学圏への進学である。これは第2希望と言うよりは第1希望がだめなときの「滑り止め」という色彩が強く、不本意にも遠距離通学を余儀なくされているというのが実態ではなかろうか。(表2-1, 2-2参照)

B中学校の例

「公立どこでも良いという第4志望については、山城南北通学圏が一緒になったことによって、大変遠いところに行かねばならず、それで決定した生徒にとっても通学に困るし、第4志望自体を敬遠する生徒や保護者も多い。総合選抜で特活推薦に入らなかった生徒は、どこへ行くかわからないというレベルとは全く違う。」

地域が広がったからといっても、行きたい高校が増えたわけではなく、近くにある「普通の学校」の数は減ってきている。「できる」生徒にとって選択の幅が増えただけである。

学校間格差

C 中学校の例

「総合選抜の時のように公立第Ⅰ類ならば同じラインで合否の判定ができていたのに、学校間格差が大きく、読めない。そのために、オール3ある生徒が志望校の書き方で公立に全く合格せずにやむなく併願私学に進学。しかし、そこは行く予定も全くなかったところで、途中で退学して再度翌年に受験し直す、といった例が起きました。また、逆にオール1に近い生徒が、第1志望をうまくその年に定員割れを起こした所にしていたため、いい加減な中学校生活を送っていた生徒であるにも関わらず合格したが、高校入学後すぐに退学するなどといった例も出ました。」

「レベルの高い公立高校が多くなったため、学力の高い生徒にとっては選択の幅は大変広がったと思う。しかし、以前ならそういう学力の高い生徒が私学専願になっていって、公立に何とかギリギリ入れたという生徒も、学力の高い生徒が公立をねらうために入れなくなった。」

複雑化

中学校の現場では進路指導の多くを公立高校の入試制度の学習に費やす。毎年のように変更される上に、いくら読んでもなかなか理解できない複雑な入試制度。「推薦」と「特色」、「第1志望」と「第1順位」、「適性検査」と「学力診断テスト」の違い、内申点とアチーブの扱いなど、教師でも難解な制度を生徒や親に周知徹底するのは至難の業。第3順位まで記入できて、それでもだめなら「どこでもいい」というのもありと聞くと、『『○』しておけばどこかには行けるやろ』と思ひこむ生徒がいても不思議ではない。(実際には第2順位までで100%だというのに。)

また、中学校の教師にとっては進路事務が大変煩雑化した。毎日の終学活では私学のチラシと同じぐらいに公立高校のチラシを配布する。1学期から学校公開の案内、申し込み、事前指導に振り回される。入試に際しての事務量も以前より格段に増えた。

D 中学校の例

「公立が読めないために私学の併願を進める事が多くなり、事実上一昨年度に担任した時には、全員に併願を勧めたため、教師側もその書類が大量になり、事務的にも大変だった。また、十分成績があっても落ちてくる生徒のことを考えてもやはり併願指導は必要だったと思われる。そのため、今後もこの傾向は続くと考える。」

F 中学校では1クラスだけで調査書を100枚書いた。(公立・私立)

公立だけでも報告書、推薦書の他に生徒の書いてきた自己申告書の添削や作文・面接の指導があり、目が回る忙しさ。

E 中学校の例

「教師側としては、適性や推薦の生徒の書類をたくさん書かねばならず、また落ちてきては次の所の書類を書くというように大変手続き的にも負担が大きかった。特に公立推薦の書類は一生懸命たくさん書いても高校側で参考にしてもらっているのかどうか大変疑問。同様に公立内申で、総合学習の記述欄が出来たが、あの欄についても文章で延々と書かねばならず、コンピュータ化されていなかった我が職場では大変負担でもあり、これを書いて何か参考にされるのか疑問であった。」